

書評論文：橋本 直樹 『「共産党宣言」普及史序説』  
八朔社 2016年 6 月， 405p.

黒 滝 正 昭（宮城学院女子大学・名誉）

I. 本書の構成

まえがき pp.13-19

第1部 『共産党宣言』初版研究の新段階  
pp.21-204（計184p.）

第1章 『共産党宣言』初版の確定  
pp.22-44（計23p.）

第2章 『共産党宣言』初刷の確定—23  
ページ本の種々の刷— pp.45-71  
（計27p.）

第3章 『共産党宣言』23ページ本の表  
紙・各ページの複製について  
pp.72-96（計25p.）

第4章 『共産党宣言』23ページ本所見  
pp.97-106（計10p.）

第5章 『共産党宣言』はいつどこで印刷  
されたのか pp.107-131（計25p.）

第6章 『共産党宣言』の『ドイツ語ロンド  
ン新聞』再録の背景 pp.132-150  
（計19p.）

第7章 M. フント著『「共産党宣言」は  
いかに成立したか』に寄せて  
pp.151-204（計54p.）

第2部 『共産党宣言』出版史・影響史の  
研究から pp.205-400（計196p.）

第8章 共産主義者同盟再組織の試み—  
マルクスのロンドン亡命（1849

年8月）から「三月のよびかけ」  
（1850年3月）直前まで—  
pp.206-228（計23p.）

第9章 共産主義者同盟活動期の普及史  
から pp.229-254（計26p.）

第10章 『共産党宣言』最初の英訳  
pp.255-310（計56p.）

第11章 『共産党宣言』1872年ドイツ語  
版の刊行経緯 pp.311-341（計  
31p.）

第12章 カウフマン著『ユートピア』へ  
のマルクスの助言 pp.342-364  
（計23p.）

第13章 『共産党宣言』1900年ロシア語  
版「序論」—階級闘争史観の起  
源についてのプレハーノフの所  
説— pp.365-380（計16p.）

第14章 日本における『共産党宣言』の  
翻訳＝影響史について pp.381-  
400（計20p.）

あとがき pp.401-404

こうして各部・各章を一覧してみると、下線  
を付したように、第1部の初版研究よりも第2  
部の出版史・影響史の方に12頁多く紙数が割か  
れており、第1部では第7章、第2部では第10  
章が他の章の倍以上の分量になっていることが  
分かる。さらに各章のテーマは、それぞれ非常

に立ち入った具体的なテーマになっている。

著者は「あとがき」で「本書の第1部によって、『共産党宣言』初版23ページ本についてのわが国の研究は、その国際的な水準を理解できるところにまでなんとかようやく辿り着くこととなったのではなかろうか。また、わが国の『宣言』の普及史研究も…その立ち入った研究は、『宣言』最初の英訳、そして多くの刊本の底本となった1872年ドイツ語版についての考察等、本書の第2部によって、ようやく緒に就くこととなったのではなかろうか。したがって、本書は『宣言』普及史研究のあくまでも序説でしかない。」(p.402)と述べている。これが本書の表題に表れていると思われるが、私の観るところ著者は、初版研究ではすでに B. Andréas, W. Meiser, T. Kuczynski, M. Hundt, J. Grandjonc, M. Kliem 等の国際的水準に達して論じているし、普及史研究では資料の探索と分析に深く入り込んでいて、「序説」の域をはるかに超えている。私流に本書の表題を付ければ、『「共産党宣言」初版の出版・普及史』とすべきところで、昨年7月関西学院大学・経済学史研究会例会案内の英文にある“The Publication of the First Edition of the ‘Communist Manifesto’ and its Effective History”は、極めて的確な把握と思われる。

## Ⅱ. 各章の概要と問題点

(1) 各章の概要については「まえがき」で著者自らまとめている (pp.16-19) ので、繰り返さない。第1章、5章では初版の確定が問題にされている。個人の著書の場合、初版の確定

は表紙・扉等の記述によって簡単に行われるが、『宣言』の場合、そうは行かない複雑な事情がある。これまで初版と見なされたことのある三つの相異なる版が存在する (Meiser 1996)<sup>1)</sup>。

- a) 「23ページ本」：共産党宣言。1848年2月公刊 (Veröffentlicht)。ロンドン。「労働者教育協会」の Office において J.E.Burghard が印刷 (Gedruckt)。46, Liverpool Street, Bishopsgate [23ページ]
- b) 「30ページ本」：上記下線部は全く同じ [30ページ]
- c) 「ヒルシュフェルト版」：共産党宣言。1848年2月公刊 (Veröffentlicht)。ロンドン。48, Clifton Street, Finsbury Square 英語および外国語印刷, R.Hirschfeld が印刷 (Gedruckt)。1848年。[24ページ]、

以上のうち c) は、旧 MEGA がロンドンの住所録で、ヒルシュフェルトの印刷所の住所が標記住所になるのは1856年であることを突き止め、初版ではありえないことが立証された (本書 p.24 以下同様)。問題は a) と b) で、旧 MEGA は、a) が1848年2月マルクスの手稿に基づいて発行された初版であり、b) はその誤植等を修正し1848年前半にロンドンで印刷発行された補訂版 (p.27)、と推定した。

しかし印刷所の所在地に関しては、a), b) にも問題がある。当時のロンドンの住所録、人名録、商工業者名簿等を調査しても、この所在地にはブルクハルトという人物も労働者教育協会の印刷所も記載が無く、ヒープスという配管工の名が出てくるだけだという (p.110)。普通

<sup>1)</sup> W. マイザー「1848年2月の『共産党宣言』—初版の成立と伝承について—」, 橋本直樹訳, 『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第41号, マルクス・エンゲルス研究者の会 2003. 12, pp.4-11.

ならこれで、印刷者も印刷所も虚偽であったということで終わるところであるが、しかし当時ロンドンに居住・活動していたことが確実であるシャッパー、モル等、他の共産主義者同盟の同盟員たちも、同じくこれらの住所録等には記載が無いこと、他方、ロンドン共産主義労働者教育協会の議事録、ブルクハルト & Comp. に臨時に雇われたシャーベリッツの日記等々の資料から、J. E. ブルクハルトおよび彼の印刷所の実在は確実であることが証明され、その上で上述の謎を解いていくことをめぐる W. Meiser と T. Kuczynski の間の論争、それらの資料を追試した著者の双方に対する批判的コメント (pp.107-131; Meiser 1996)。以上の展開は、なお全体としては仮説に止まるとはいえ、凄まじい迫力で研究が深化していく過程を実感させる。

現段階で確からしいのは以下の通り。ブルクハルトは『ドイツ語ロンドン新聞』の印刷所・出版社・発行所の所有者であったハリスンの下で、印刷所の職工長として働いており、植字工の採用の任にも当たっていた。これがブルクハルト & Comp. である。この所在地は、ウォレンストリート 19 であるが、ブルクハルトの自宅住所は Liverpool Street 46 と推定され、ヒープスからの又借りの可能性 (?)。『宣言』の印刷・発行は、労働者教育協会が購入した活字セットをブルクハルトが借りて植字、印刷は『ドイツ語ロンドン新聞』の印刷所で行い、政治的理由等で自宅住所に労働者教育協会のオフィスを置く形で 1848 年 2 月に公刊した (Meiser 1996)。

もう一つの問題は、旧 MEGA の推測、即ち a) は 1848 年 2 月マルクスの手稿に基づいて発行された初版、b) はその誤植等を修正し 1848 年前半にロンドンで印刷発行された補訂版という、

これまで広く受け入れられてきた推定は正しいかどうかである。

この点に関してはクチンスキーが 1988 年、幾つかの理由を挙げて 30 ページ本が初版であるという、従来説を逆転させた仮説を打ち出した (本書 pp.37-41)。彼自身は 1995 年にこの仮説を撤回したが (同 p.37)、この仮説は研究史において重要な意味をもった。彼は、当時伝承が確認されていた 23 ページ本 22 冊 (5 種類の刷) [30 ページ本は当時 6 冊] のうち、初刷と目された一番目立つ誤植のある刷、すなわち第 17 ページ目のノンブルが誤って 23 と誤植されていた (p.99 図版 3)、この通常では考えられない誤植がなぜ生じたか? そこに焦点を当てて理由を推測したのである。30 ページ本の S.21-22 の内容 (『宣言』第Ⅲ章の 1) 反動的社会主義の始めの部分) は、23 ページ本の S.16 最終段落から S.17 の内容に、少しずれるがほぼ対応している。そこで、30 ページ本が先ず初版として発行され、それを印刷原稿として 23 ページ本が植字されたと考えると、17 ページ目の植字が終わった時に 17 というノンブルを入れるべきなのに、原稿である 30 ページ本について引きずられて 23 というノンブルを入れてしまった、という推論が成り立つのではないかという訳である (p.39)。

これに対してマイザーは 1991 年、17 の代わりに 23 というノンブルが誤植されるより合理的な説明を与えて、23 ページ本が 1848 年ロンドンで発行された初版であり、30 ページ本は、幾つかの根拠 (活字の種類・印刷用紙・再録の現れる時期等々) を元に 1850 年末～51 年初めドイツで発行されたものと推定した (本書 p.43)。マイザーが着目したのは、上記誤植 23 ページ下部欄外中央に 2 という折り丁番号が印字されている (本書 p.99 図版 3) ことで、この誤植には組み

付け・版の掛け方が関連しているのでは？と気付いた。以下詳細な説明（同 pp.56-60）は、印刷専門用語を用いた非常に細かい議論で私にはよく理解出来ないが、要するに23ページ本の本文は、印刷全紙一枚分16p.（pp.1-16）の第一折りと半印刷全紙分8p.（pp.17-24）の第二折りとで構成され、上述折り丁番号2とあるのは、この第二折り（pp.17-24）分が両面印刷されていることを意味する。p.24は空白なので、この第二折りのページの割り振りのさい、紙折りの仕方がクロス折りか平行折りかに従って、同じ場所（本書 p.59の説明図では、図1の左下と図4の左下）に17または23いずれかのノンブルが植字されることになる。植字工がこの折りを誤認すると、17のノンブルが入るべきところに23のノンブルが入ることになり、誤植はこの二つの数字間に限られるというのである（同 pp.58-59）。

しかし、ここまでまとめると疑問が出てくる。植字工が折りを誤認した場合、誤植の範囲は17ページだけに限られるのかどうか？本書 p.59の図1～6を見ると、他のノンブルもすべて影響を受けるのではないだろうか？しかし同 pp.70-71の異本対照表によれば、誤植は S.17→S.23しか挙げられていない。オリジナルで S.17-23すべてを確認できないが、S.17以外はページ付けがすべて正常、ということがどうしてあり得るのか？

またマイザーは、マルクスが『資本論』第1巻の二箇所の注（MEGA II /8, S.470, 713）で『宣言』から引用を行っているさい、出典を F. Engels und Karl Marx: „Manifest der Kommunistischen Partei. Lond. 1848“, p. 5, あるいは Karl Marx

und F. Engels : „Manifest der kommunistischen Partei. London 1848“, p.11, 9としていることを受けて、1848年にロンドンではただ一つ23ページ本だけが印刷されたことの証拠の一つだとしている<sup>2)</sup>。しかし引用されている文章を23ページ本の当該箇所と精密に照合すると、綴りやコンマ等の細かい相違の他に、内容に関わるような相違もある。p. 5では zeichnet という単数形が zeichnen という複数形にされていたり、同じく Lebensstellung が Lebensstellungen にされている。p.11では原文に無い also が付け加えられている。果たしてマルクスは、23ページ本によって引用したのか？疑問が生じるのである。

30ページ本ではどちらの箇所もページが異なるので、これは除外されるが、ヒルシュフェルト版（24ページ）[それでも標記上は London 1848！] ではどうなのだろうか？本書 pp.387-388によると、マルクス・エンゲルス遺文庫の蔵書にあったヒルシュフェルト版を櫛田民蔵が1921年に SPD 文書主任から献呈されたということであるから、マルクスの手許に、ヒルシュフェルト版があったことは確実である。他方今日の調査では、遺文庫には『宣言』の [London 1881] しか見出されない（MEGA IV /32, S.447）。

関連してもう一つ：1873年2月12日付リープクネヒト宛エンゲルスの手紙は「[ロンドンの] 労働者[教育] 協会が『宣言』を3回も自費で刊行したことを多として」と述べている（本書 pp.334-335）。「3回」とは何を指しているのか？1872年ドイツ語版より前の版で労働者教育協会が発行主体と言うと、23ページ本と30ページ本は間違いなく含まれると思われるが、もう一つは？

<sup>2)</sup> W. マイザー「1848年2月の『共産党宣言』—印刷の経緯と伝承についての新たな研究成果—」，橋本直樹訳，『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第37号，八朔社 2002年 2月，p.14；前掲第41号，p. 8）

(2) 第7章は、『宣言』の成立を、共産主義者同盟の運動史の側面から分析した M. Hundt の重要な著作の著者訳に基づいて展開された章である。ここでは著者の次の叙述に疑問をもった。「注目すべきは、[共産主義者同盟第2回大会(1847年11月29日～12月8日までロンドンで開催)で採択された]規約第36条において『毎年開催される大会がそのつど、大会の経過と結果についての回状のほかに「宣言を党の名において」発表しなければならない』と定められていたことから生ずる問題に関してである。フントは、その後の同盟の活動様やエンゲルスの後の指摘などから、『「共産党宣言」の有効性は1年間にすぎないと考えられてしまうということには決してならなかった』と判断している」(本書 p.184)。

著者自身は「当時の同盟の規約によれば、『宣言』は」組織の綱領としてはそもそも1848年のただ1年間だけ有効である旨、定められていた」(同 p.309)と理解しているので、フントの規約理解も著者と同じだと受け止めた上で、その後の経過はこの規約に縛られなかったというのがフントの趣旨であると捉えたようである。しかしフントの原文: Das bedeutete nun keineswegs, die Gültigkeit des » Kommunistischen Manifestes 《 sei nur für ein Jahr gedacht gewesen.<sup>3)</sup> これは、規約の文言そのものが、『宣言』の有効性を1年に限るという意味で書かれているのでは決してない、という趣旨であろう。著者の理解とは正反対である。

規約の原文は次の通りである。Art.36. Der Kongreß erläßt nach jeder Session außer seinem Rundschreiben ein Manifest im Namen der Partei.

(Der Bund der Kommunisten Dokumente und Materialien. Bd. 1, 2. Auflage, Berlin 1983, S.629) なお Art.33 に Der Kongreß versammelt sich im Monat August jedes Jahres. とある (ebd.)。すなわち毎年8月に大会を開き、そこで回状と党の名による一個の宣言を公けにするというだけで、そこで発せられた宣言の有効期限については何も規定されていない。

これに関連してもう一つ押さえておくべきことがある。この規約 Art.36の規定は、1847年6月9日の同盟第1回大会で可決された規約草案には無かった条項であること (a.a.O., S.467f.)、また1848年11月末～12月初めにモル等ロンドンの中央委員会が新たに作った「革命党の同盟規約」では再び削除されていることである (a.a.O., S.879)。マルクスが出席して強いリーダーシップを発揮した第2回大会の成果の一つと捉えられるのではなかろうか。

(3) 第9章、第11章では、『宣言』1872年ドイツ語版の特異な誕生経過が明らかにされる。これは極めて興味深く、また重要である。1870年7月普仏戦争の勃発以降、社会民主労働者党選出の議員であった A. Bebel, W. Liebknecht 等がプロイセン政府の戦争継続のための戦時公債発行・追加支出案に反対投票を行うと、政府はブラウンシュヴァイク党委員会メンバー逮捕で押収した資料をもとに、リープクネヒト、ベール等の大逆罪をでっち上げ、12月彼らを逮捕し、裁判にかけた。これが有名な「ライプツィヒ大逆罪裁判」である。このとき大逆罪の準備行為を立証する証拠書類の一つとして検察側が全文提出し、審理で読み上げられたものが、押収された『共産党宣言』(1866年にジークフリー

<sup>3)</sup> Martin Hundt, Wie das » Manifest 《 entstand. 2., überarb. u. erw. Aufl. Berlin 1985, S.97.



ト・マイアーによってベルリンで新しく発行された再版）であったのである（本書 p.326, 312.）。リープクネヒト等はこれらの裁判資料を逆用して、『ライプツィヒ大逆罪裁判 詳細報告』Leipzig. Verlag der Expedition des „Volksstaat“, 1872（本書 p.330 写真1～2）として全審理記録及び提出資料を分冊で発行（これは裁判資料そのものの出版なので、合法的！）。その第3分冊に『宣言』が収録され、数千部規模（本書 p.337）で大衆に普及されることになった（本書 pp.320-329）。

この『詳細報告』の『宣言』部分を、誤植もそのまま抜刷として、タイトルページ（Das Kommunistische Manifest. Neue Ausgabe mit einem Vorwort der Verfasser. Leipzig, 1872. Verlag der Expedition des „Volksstaat“）を新たに付け、Marx, Engelsの序言（S.3f.）、本文（S.5-27）を含めた全28S.の冊子として少部数（しかし少なくとも数百部。本書 p.337, 341）、専ら党内向けに発行・販売された（こちらは非合法？）のが、1872年ドイツ語版だということである（同 pp.329-331）。

これまで手紙等では普通に用いられてきた「共産主義宣言」という通称・略称が、1872年ドイツ語版で初めて『宣言』のタイトルページに用いられ、本来の表題「共産党宣言」は、本文開始ページの冒頭にハーフタイトルとして掲げられた。『宣言』は一つの歴史的文書であって、それを改める権利は、もはやわれわれにはない」というマルクス、エンゲルスの原則からすれば、彼らがこの表題の変更を行う理由はない。エンゲルス等に相談なくライプツィヒのヘプナー等の判断で行われ、エンゲルス等は消極的に事後了承したものと推定される。では何故ヘプナー等は表題を変更したか？ 著者は、「共

産党」は1848年当時の「共産主義者同盟」を指しているのであって、今日自分たちの「社会民主労働者党」は全く別物であることを強調する政治的理由（pp.314-318）もあったろうが、より基本的には裁判記録の別冊として発行したものであるから、審理における記録・資料の形式を変更せずそのまま用いた〔さらに言えば、『宣言』単独でも、この形で出版すれば非合法にはできないのではないか？—黒滝〕と観るべきだろうと判断している（同 p.339-340）。妥当な判断と思われる。

この点をヨリ立ち入って考察するために、本書 p.330に掲げられた「ライプツィヒ大逆罪裁判」第2分冊表紙に書かれている全文を本論で紹介すべきであろう。ここに掲げられている写真版は、字が細かすぎる上に不明瞭で、判読できないからである。

恐らくエンゲルスも、ハーフタイトルに原題が掲げられているので、あえて反対はしなかったのではなかろうか？ 因みに私の手許にある K. Kautsky の序文付き Achte autorisierte deutsche Ausgabe, Berlin 1918も、タイトルページ、ハーフタイトルとも同じ形式である。

これに関連して未だ不明瞭なのは、「当時ドイツで『共産党宣言』を公刊することは〔社会主義者取締法以前でも〕直ちに大逆罪に問われ、大逆罪裁判という厄介をしょい込むことになった」（p.314）であろうという、パーベル、エンゲルス、そして著者の判断の根拠である。当時の法律の「大逆罪」の条項はどうなっていたのだろうか。『宣言』の公刊そのものが、その条項に照らして直ちに「大逆罪」に該当したのだろうか？ それとも本書 p.324にあるようなその他諸々の「罪状」も合わせて挙げ、しかしそれでも「罪状は〔法に照らしては〕証明でき

なかった」(同 p.326) という *MEW*, Bd.33, S.756, Anm.300 の観方の方が正しいのだろうか? ヘプナーは無罪になり, ベーベルとリープクネヒトは2年の要塞禁固 +  $a$  に処せられた(同 p.326)。この三者に対する判決の相違は, 何を根拠にしているのか? この辺りを明瞭にする必要があると思われる。

この他第10章『宣言』最初の英訳者マクファーレンについても, 最新の貴重な研究成果が紹介・分析されており, その他の章でも興味深い分析や問題提起があるが, 私のエネルギーと時間切れで, 残念ながら今回の論文はこれで終わりたい。

※本稿は, 2017. 7. 1 (土) 15:30~17:15 関西学院大学・池内記念館で行われた経済学史研究会第241回例会で行った私の書評報告に, 若干手を加えて書評論文に仕上げたものである。